
召還者の異世界奮闘日記

銀野 臨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召還者の異世界奮闘日記

【Nコード】

N8852Y

【作者名】

銀野 臨

【あらすじ】

家でテレビを見つつくつろいでいたらいきなり異世界にトリップした翔子

なんやかんやで1年たちこちの世界にも慣れてきて元の世界に変える方法を探しつつ平穏な生活を送っていた　しかしある1人の訪問者によって平和な生活に崩壊の兆しが・・・？

プロローグ（前書き）

文才もないのに勢いで書き始めた小説です

ご都合主義で強引で展開が急ではやいかもです

お目汚しにしなければならないと思うんですが読んでくださったら幸いです！

ブローグ

タイムマシンがあったらいつに戻りたい？

小学生だった頃友達にそんなような質問をされた記憶がある

あの頃の幼かった私はなんて答えたのかは思い出せない

「きつと漢字テストの前がいいなゝえへへ」
というようなことを言っていただろう

もしも、いや今そんな質問をするような人は私の周りにはいないが
もしも、私が今その質問を投げかけられたら全力でそりゃもう全力
で答えるだろう

1年前のあの日に戻せと

この世界にトリップしてしまった日に戻せと

序章 1

「シチューできましたア！！持ってってください！！！！」

私は大声で叫ぶ。

こんなにビックリマークつけてしゃべるのなんてこの時間以外はないよなーというどうでもいいことを頭の片隅で考えつつ次のメニューに取り掛かる。

ここはアネット食堂。

小さな町フェーンの隅にある小さな食堂だ。

小さな食堂だが味は確かなので連日客で大賑わい。よってお昼時となると殺人的な忙しさになる。

だって大賑わいなのに店員が私を含めて4人しかないのだ。

今でさえ殺人的に忙しいのに私が拾ってもらう前は3人で切り盛りしていたというのだからその忙しさを考えると鳥肌が立つ。

1年前、私はこの世界にやってきた。

その日もいつもと同じように過ごしていたのだ。

訳あって高校生なのに一人暮らしをしていた私はそろそろご飯を作ろつかなくなんて考えながらだらだとテレビを見ていた。

そして一瞬まばたきしたらこの世界だった。本当に一瞬で来てしまったのだ。

普通異世界トリップする時って神様が現れてくみたくなくだりがありそうだがそんなもん無くいきなリトリップである。要するに説明

ゼロである。

しかもトリップした時間が最高に空気読めていなかった。
場所はアネットさんの家。そこはいいと思う。人の家だしく小説
に出てくる森とかじゃないし。

しかし！タイミングが悪かったのだ。その日はアネットさんの娘さん
のお葬式の日だった。しかも弔いの儀という家族以外は絶対に立
ち入ってはならない儀式の最中に。

空気を読めないにもほどがあると思う。

幸いといっていいのかはわからないがその時そこにいたのは娘さん
の家族であるアネットさんとアネットさんの1人目の息子のドミニ
クさん、2人目の息子のアドルフくんしかいなかった。

その3人が本当にびっくりした顔をしていたのを覚えている。なん
でも弔いの儀は家族以外は入れないように結界を張るらしい。なの
に私が入ってきたからとんでもなく驚いたと後日言っていた。

まあ私もそれに負けなくらいびっくりしてたけどね！

でも驚きすぎた人間は逆に冷静になるようだ。

私はその例に漏れずものすごく落ち着いていた。普段でもこんなに
落ち着いてねーよってくらい落ち着いていたのだ。なので周りを観
察する余裕が生まれた。

そして余裕が生まれてしまった結果ある考えに至ってしまった。

これは私が好きな小説のジャンルのアレとまったく同じじゃないか？
あの違う世界にレッツゴー！なあのジャンル・・・

い、いやいやいやアレは小説の中だけだっ！ありえないありえないやでも固まってる人たちの目の色と髪の色がありえないくらいカラフルだし家の作りも日本と違う。さらに決定的なのはランプらしきものが浮いていたのだ。空中に、フワッとワイヤーも無く・・・

そこまで考えて背中に汗がたつたのを今でも鮮明に覚えている。そして私は震えながら質問した。

「ここはどこですか？」

記憶喪失者かっ！ってツツコミが現実逃避のように脳内でとんだ。

序章 2

私の「ここはどこ」発言でアネットさん達3人は我に返ったようだった。

固まり状態からの復活である。そこまではいいんだけどその後の行動が問題だった。なんとまあ我に返ったドミニクさんがナイフラしきものを懷から出したんだよね。

あはは・・・やっぱり普通に懷に刃物入ってる時点で日本じゃないよなあ銃刀法違反してるくらい刃渡り長いし。

私がこんなくないことを考えている間にドミニクさんは私のすぐそばまで来ていて刃先を私の首元に向けていました。なんてすばやい行動。

「手、挙げる。余計なことはするなよ？血は見たくないからな。」

もちろんソッコー挙げますよ手。だって怖いからね刃物。平凡な女子高生は刃物向けられたら言いなりになっちゃいますよ。つか物騒なセリフだなオイ。

そんなこと現実逃避じみたことを考えている私をよそにドミニクさんはおとなしく手を挙げた私を縛ろうと柵から縄を取り出していました。

しかも結構太めの縄です。紐とは間違っても呼べないくらい太い。縛られたら絶対痛いです。M気質の人以外は絶対無理ですアレ。ちなみに私はどちらかといえばSです。うん要らない情報ですね。そう、これも現実逃避です。

ってまた変なこと考えている間に目の前に縄がつ！つか私ってさっきから変なことしか考えてないな！！しょうがないかこの状況が変だもんね！！！！

あーでもやつぱり嫌だよこんなの。大人しくしてたほうが良いだろうけどやつぱり嫌だ。私悪いことしてないのに何で縛られなきゃいけない訳さ！そんな趣味は無いんだよ！！

・・・あ、泣けてきた。急に泣けてきたよ私。さっきまで落ち着いてたのにね。グスッ。感情の起伏が激しいんだよね女子高生は。うー人前で泣くなんて屈辱。我慢せねば・・・グスッ。

って泣いても無視かよ！この男は！！か弱い？女が泣いてるのにシカトだよシカト。なんて冷徹なんだ。この悪魔、人でなし、鬼畜やローがああああ！！！！

逃げたい。けどもう遅い。縄は私の手首に巻きつけられている。そして縄が縛られる瞬間

「やめなドミニク。今すぐナイフを置いて縄もしまいなさい。」

凜とした声が響いた。

そのときの私は涙で視界が潤んでいたしドミニクさんを内心のしる事と逃げる方法を考えることに必死だったので一瞬誰が言ったのかわからなかった。というよりここにいる誰かが私をかばうなんて思っただけだったので空耳かと思っただけだ。

「でも母さん！結界を張ってるのに中に入ってくるなんてありえないだろ！？そんな怪しいやつを捕らえないなんて」

しかし目の前の男が反論しているから空耳ではない様子。まじか。かばってくれる人がいたのか。この声からして1人いた女の人だな。

「いいからしまいなさい。そんな小さな女の子泣かせて……。いい年した大人が何やってるの。」

女の人が言う。ああ、なんていい人なんだろう。でも小さな女の子って私一応17歳だけど。まだ小さいのか？

「泣いてるのも油断させる作戦かもだろ！？それに見た目も魔法で変えてるのかもだし！」

鬼畜男（いま命名）も言い返す。確かにごもつともですけどそんなことはありません。

「うるさいよ！もう20年近く食堂やってきた私をなめんじやないよ！悪いやつかどうか見極める目ぐらい持つてるわ！！それとも母さんを信じられないの！？」

とうとう女の人がか叫ぶと鬼畜男が黙り込んだ。どうやら女の人勝利のようである。

言い終えた女の方は私のそばにやってきて微笑みながら言った。

「悪かったね、怖い思いさせて。もう大丈夫だから安心なさい。」

私はさっきまで恥ずかしいとか考えていたくせにその言葉と微笑みに思いっきり泣いてしまった。

序章 3

「ほら、これ飲みな。体が温まるから。」

「ありがとうございます。」

かばって貰って大泣きした私はその後ココアらしき飲み物を飲んでました。

なぜ「らしき」がつくのかというと見た目も香りもココアなのに味がコーヒーという摩訶不思議な飲み物だったからです。絶対甘いと思ってたのに！苦かったよコノヤロー

「それであんたはどこからどうやってここに来たんだい？」

さっきアネットと名乗った女性が聞いてくる。

い、いきなり答えにくい質問を・・・

まあそこは気になるよね普通。やっぱ正直に答えるしかないよなー私嘘下手だし。へんに嘘ついてても余計に疑われるだけかもだし。

「私は日本という国から来ました。何故ここに来たのかはわかりません。家にいたら急にここに来ていました。」

正直に答えてみた。そして思う。

これ自分だったら警察に突き出すわーと……。怪しいことこの上ないよ！

「ニホン？どこだいそこは？初めて聞いたよそんな国名。」

やっぱり聞いたこと無いんですね……。懐からナイフ（刃渡りが長いやつ）が出た時やココアらしきものが出た時点で確信してたけどそう実際にいわれるときついモノですな。

ああ……。トリップ小説読むのは好きだったけどな。体験はしたくないよ。

「あの……。ここはなんていう国ですか？教えてください。」

99、99999%確信しても一応確かめちゃうのが人間です。ここでドイツだとかイギリスさ！とか言われたら泣いて喜ぶ。いやそれでも十分おかしいけど。自宅から外国もおかしいけどね。

「ここはフェルバンティエって国だよ。この大陸一大きな国さ。」

さて、結論。

ここは異世界です。

だって私はいたって普通の高校生だったから大陸で一番大きな国の名前くらいは知っている。でもフェルバンティエなんて国名聞いたことが無い。

「フェルバンティエ……。そうですか……。すみません私いまから突拍子も無いと言いますが良いですか？」

さて現実を受け止めたら（まだあんまり受け止め切れてないけどね）この世界での協力者を得なければ……。とゆーことで異世界からきたってことを話してみようと思う。だって私が知っている人はここではこの人たちしかいないだろうから。さっきも言ったとおり私は嘘が下手だから本当のこと言っしかないしね。私一回認めちゃえば

結構順応早いんです。それに割り切ることは得意だしね。

話すと決めたけど一応話す前に許可を取ってみた。拒否されたら終わりだけど。

「何を言うつもりだ？」

鬼畜男さんが睨み付けながら聞いてくる。

あ、さつきから全然触れてなかったけどこの人ずっといましたよ。んでずっと私を睨んでました。親の仇つてぐらい鋭く睨まれてました。でも触れても気分が悪くなるだけだから無視してました。この人のこと考えるよりアネットさんと話すほうが有意義だしね！

あともう一人の男の子もずっといます。この子はさつきから私をガン見してる。穴が開くんじゃないかってくらい見てます。そして一言も発さない。謎な子だ……。

「いや、だから突拍子も無いことです。たぶん信じてもらえそうに無いから先に確認をとってみたんですけど……。」

言ってもいいか聞いたのに内容を聞かれては確認の意味が無いではないか！

「話してみなさい。ちゃんと聞くから。」

アネットさん！あなたマジで女神です！！ああ……アネットさんがいないときにトリップしなくてよかった。そしたら普通に縄で縛られコースだったもんね。本当に感謝です。

「えと……じゃあ話させてもらいます。どうやら私この世界とは

違う世界から来たみたいなんです。」

意を決して私がそういうと

3人はびっくりした顔をして再び固まった。

序章 4

「・・・はあ？違う世界だと？何を言っているんだお前は。頭おかしいのか？」

復活を果たした鬼畜男の第一声がこれ。頭おかしいだど！？自分でもそう思うわっ

「私だつてそう思いますよ。でも他に説明がつかないんですよ。私の住んでいたところにはフェルバンティエなんて国無いですし魔法も使えません。この飲み物も飲んだこと無いです。はじめて見ました。」

「そんな理由で信じられると思うのか？」

「思いません。でもこれが事実なんです。あなたたちも日本なんて知らなかったでしょう？でも私はそこで生まれ育ったんです！これは何があっても変わりません！！」

感情が高まって思わず大声を出してしまった。やっぱり女子高生は感情の起伏が激しいようです。いかんいかん。

「異世界？本当に？」

突然聞いたことの無い声が響く。
びっくりしてそっちを見るとさっきまで黙秘を貫いていた少年が口を開いていた。

「本当に異世界からきたの？ねえ本当に？嘘ついてないよね？違う世界から来たの？ねえどうなの？異世界からきたの？」

「う、うん。嘘ついてないよ。違う世界から来たよ。」

いきなり饒舌に喋りだした少年にビクビクしつつ答えると少年は

「じゃあちよつと待ってて！すぐ戻るから。」

といって部屋の奥に走って消えていった。

残された私たち3人は呆気にとられていると宣言どおりすぐ戻ってきた少年が1冊の本を手にしていた。

そしてものすごい勢いでその本を差し出して

「異世界からきたならこれ読める？」

と言った。

「アドルフ、それお前がめっちゃめっちゃ大事にしてた本だろ？そんな怪しいやつに見せて良いのか！？こいつが言ってること嘘かもだぞ。」

「うん。学校の先生にもらった大切な本だよ。いま僕は異空間の研究をしていて先生にそのことについて相談したんだ。そのときにこの本をもらった。異世界から来た人が書いたものらしいけど文字がここで使われてるものと違って読めないんだ。しかも不規則すぎて解明もできない。だから僕は異世界からきたっていう人がいるなら読んでもらいたい。」

アドルフくんが話す。

が、そのときの私はセリフの後半を聞いてなかった。だって異世界の人を書いた本だと！？完全に私と同パターンじゃないか！なんかヒントがあるかもしれん。絶対読ませてもらおう！って考えていたからね。

「よ、読みたいです！その本読ませてください。」

私がものすごい勢いでそういうとアドルフくんは私に本を差し出した。

私は急ぎつつでも慎重に本を開く。

そこには見慣れた文字が並んでいた。

「これ日本語だ……。これ私の国の文字です！」

日本語の登場に感動して涙が出そうになる。少なくとも私以外にもここに来た人がいると思うとなんだか安心した。

「本当！？じゃあ読んでっ！早く」

感動していたらせかされたので声に出して読み始める。

「えっと、《私がこの世界に来てもう2年は経っただろう。今更だが記録をつける代わりに日記を書きたいと思う。この世界に私が来たのはさつきも書いたように2年前だ。家でくつろいでいたらここに來ていたのだ。幸運にも村のすぐそばに落ちたので死なずにすんだ。だが、今でも、もし村の近くにある森に落ちていたら、と思うとゾッとする。私はやさしい村の人たちに拾ってもらっていま

もこうやって生きている。本当に村の人たちにはよくしてもらっている。感謝してもしきれない位だ。早く恩を返せるようになりたいと思う。》・・・１ページ目はこれでお終いです。」

読んでみて私とまったく同じだと思う。私も本当に一瞬でこっちに來てしまったのだ。おなじでホツとする反面２年も戻れてないと書いてあったので落胆する。やっぱりすぐには帰れないらしい。

「そんなことが書いてあったのか・・・。ねえ続きも読んで！」

どうやらアドルフくんは信じてくれたっぽい。彼がこの本持つててよかったわー。

「アドルフは信じてるみたいだけど俺はまだ信じてないからな。本当は読めて無くても読めてる振りしてる可能性だってあるんだ。」

そついやまだ一人いたよ！しかも一番手ごわいのが。

鬼畜男さーん！まだいいですか！もういいじゃないですか。せつかく信じてもらえる雰囲気だったのに台無しだよ。

でも、この男のいつてることも一理ある。実際私が読めている保証などどこにも無いのだ。

「確かに私が読めている保証などどこにも無いです。でも本当に読めてます。信じてください」

私ができることなんて信じてくれというだけだ。あーあせめてあつちの世界のものを持ってきてたらな。証明になるのに。いま証明なんてできないよ。

「じゃあ書いてもらえばいいんじゃないか？その本に載っている文字を。スラスラと書ければ彼女は本当にその文字を使っていたのだろっ。今の短時間で覚えるのは無理だったろっし。」

そっいつてアネットさんが紙とペンを差し出す。

・・・ナイスアイデア！アネットさんもうあなた最高です。本当にさっきからありがとうございます。

私は受け取った紙にペンで《私は異世界から来ました》と書いてみた。

「書きました。どうでしょうか？信じていただけますか？」

もう本当にいい加減信じてほしい。そう思っていつもよりスラスラ書いてみました。

「・・・うん。字の形とか同じだね。なにより書きなれてる感じがあつた。ドミニク兄さん、彼女は異世界から来てるよ。僕が保障する。」

アドルフくん！あなたも最高です！！

「・・・アドルフが言うようじゃ本当なんだろうな。普段こいつは口数が少ないがその分嘘をつかねーから。・・・・・・
・・・・・・わぁーっ たよ信じるよお前の言うこと！」

うおー！感無量ですわたくし！とうとう全員が信じてくれました。
長かった（？）戦いも終わりです。ありがとうございます鬼畜男！

「信じてくださりありがとうございます。」

「べ、別にお前のためじゃねえよっ！……！！」

……シンデレラ？

序章4（後書き）

ビックリマークが多いですね。すみません文才がないからこうやってごまかしてるんです（笑）読みにくかったらいつてくください。どうにかするので。

読んでくださってる方ありがとうございます。次でこの過去の話しは終わりになると思います。ああ、早く現在の話書きたい。

序章5（前書き）

泣きたいです。一回書いた原稿がきれいに消えました。

やっぱ一日に2回更新なんて無茶しようとするからですかね・・・。

消えちゃったけどがんばります・・・。

序章 5

ようやく3人に信じてもらうことができました。

だがしかし、私の危機的状況は何一つ変わっちゃいない。あ、いや命の危機は去ったから変わったタッチ変わったがこの異世界でどう生活していくかが何も決まってる。

ちなみにいま、私の頭に浮かんでいる案はアネットさん達に住み込みで働くことができるところを紹介してもらうことだ。今のところこれ以外浮かばないのでこれでいくしかないだろう。早速聞いてみるか！

とそこまで考えて時に気づく。

私に乗ってなくね？名前いってなかったよ。一応言った方がいいよね。

「あの、今更なんですがいままで名乗らずにすみません。私の名前は海野翔子です。海野が名字で翔子が名前です。」

「名字！？お前貴族なのか？」

鬼畜男さんが言う。え？貴族？うちはバリバリの一般庶民です。

「いえ、違います。貴族なんて身分じゃないです。こっちの世界では名字があると貴族なんですか？」

「ああ、名字は貴族様しか持つことができないんだ。ところでもう一回名前いってもらえるかい？聞き取れなくてさ。悪いね。」

「あ、いえ。翔子といます。しょ・う・こ」

「シヨウコウウ？」

「いえ、しょ・う・こです。」

「シヨコオ？」

「……………どうやら私の名前はこつちの世界では発音できないらしい。」

「あ、じゃあシーって呼べますかね？」

シーっていうのは私のあだ名だ。海野の海から来ている。

海「sea」シーである。センスについては何もいわないでくれ。考えた友達が不憫だ。彼女は3日3晩考えた末にこのあだ名にしたのだ。

「シーかい？これなら問題ないね。」

よかった。友達よ！いまここでお前の努力が役に立ったぞ！！

さてずれてしまったが本題に戻ろう。

「アネットさん、このあたりで住み込みで働けるところはありませんかね？私でもできそうなもので。」

「え？住み込みで働くのかい？……………ああ、一個あったね。住み込みで食費免除で休日もあるところが。」

なにその好条件！？好条件過ぎて怖いくらいである。

「どこですかそこ！？教えてください！！！！」

アネットさんはにやりと笑って言った。

「ここ、アネット食堂さ！」

こうして私はアネット食堂で働くことになった。

ちなみにこの後ドミニクさんの猛反対劇とかがあったけど割愛。
決めてめんどくさいからじゃない。決して。

さらに私がお約束のごとくチートで魔力がいっぱいあって制御に時間食ったとか、その制御法を覚えてくれたのがドミニクさんで結果仲良くなったとか、アドルフくんが天才過ぎて王都にあるこっちの世界で言う大学に飛び級で学費免除で行くことになったとか、あったけどそれも割愛！

うん、結構大事なことだったね。割愛しちゃったけど。

一応補足しておくといまや私とドミニクさんはめちゃくちゃ仲良しだ。私は何かあったらまずドミニクさんを頼るねってくらい仲良く

なれた。鬼畜男って言ってたのが懐かしいくらいだ。

アドルフくんは王都に先月行ってしまったが1週間おきに手紙が届くし、私とは念話という私オ리지ナルの魔法でほぼ毎日話しているので寂しくは無い。

まあそんなこんなで海野翔子こと、シーは異世界ライフを堪能(?)しつつ元の世界に変える方法を探しています！

序章 5（後書き）

おわった！過去編終わりました！！

データ消えた時は泣きそうでしたが無事過去編終わりました。

これから現在が始まるので読んでくださるとうれしいです。

表紙／タイトル／

「今日はお疲れさん。夜は特に忙しかっただろう？大丈夫かい？」

仕事が終わって夜、アネットさんが声をかけてくれる。

今日はアネットさんが言ったとおりものすごく忙しかった。なんでも町の騎士団の給料日だったらしくてみんな外食にしたらしい。食べ盛りの男共がわんさか来て疲れしました。

私は厨房で働かせてもらってるのでめんどくさい騎士たちの相手をしなくてすむがフロアのほうで働いているマリーさんとフェイトさんは大変だっただろう。ああ、マリーさんとフェイトさんというのはアネット食堂の従業員さんのことです。お二人とも美人で優しいお菓子をくれるいい人です。

そして騎士たちは隙あらばフロア担当のお2人を口説く。なんでも出会いが全然無いらしい。私もヘルプでそっちに出たときにもううんざりするくらいお世辞を言われた。アレは本当に鬱陶しかったなあ。日本人は褒められ慣れてないんだよ。耐えている2人はすごいと本気で思う。

あ、ちなみにドミニクさんもこの騎士団で働いています。でも彼は実は彼女さんがいるので口説いたりしてませんよ。

そこで私はさっき書いたとおり厨房で働かせてもらってます。元より一人暮らしだったんで料理は得意だったんです。さらに前作ってみてといわれたので作ってみた私の世界の料理がアネットさんの舌

をうならせましてそれ以来店のメニューに入りました。よって私はコックさんです。1年前は女子高生だったのにな……。

今のところメニューに入ってるのはシチュー（ちょっと意外なことにこっちにはシチューが無かった。スープは普通にあるけど。）と肉じゃがもどき、プリンもどきにアイスもどきである。

なぜシチュー以外「もどき」が付くのかというと地球とは食材が違うからである。

ジャガイモなんて無かったのです。なので肉じゃがもどきにはジャガイモと食感はずっとおんなじなのに色が青色って言うなんかものすごい野菜“ヒューレ”を使っています。なので肉ヒューレになっちゃうのだ、本当は。

それはなんか嫌なのでそのままの名前でやっているけど時々みんなに「じゃがつて何？」って聞かれる。そのたびごまかしてるけど。つつこんじゃいけないことも世の中にはあるってことさ。

私的にはアネットさんの料理のほうがおいしいんだけどねー。私の雑な料理より確実に。アネットさんの料理はマジ神です！どんなにお腹空いてなくても食べれちゃうんだからもう魔法だよな。

あ、そうそう魔法といえば私はもう一個お仕事してます。チートな能力を使って魔法で便利屋さんを。

魔法がなければ解決でき無そうなことを解決するのが仕事内容。小さな女の子から依頼で木のてっぺんに引っかけた帽子をとってくれ、から騎士団の依頼で町に盗賊が来たので捕らえるのをてつたってほしいなど、ものすごく幅の広い便利屋をやっています。

これははじめたのはせつかくあるチート能力を生かしたかったのとアネットさんにお世話になりっぱなしだったので食費ぐらい入れたいと思ってだ。はじめて半年たつが結構好評である。

「それでシー。あんた昨日さ明日から日記つけるって言ってたけどつけたのかい？」

アネットさんに再び話しかけられる。

ほえ、日記・・・？あ！忘れてた・・・

「え、えへ、忘れてました。今から書いてきます！そのまま寝ちゃうかもしれないんですよ。おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。私ももう寝るかな。じゃあ明日もよろしく頼むね。」

「はい！」

階段を駆け上がりながら返事をする。

私の部屋は3階建てのアネットさんの家の最上階、3階である。前はアドルフ君と相部屋だったけど今はアドルフくんがいなくなったので一人で使っている。

んでその向かいにある部屋がドミニクさんの部屋。2階はリビングとアネットさんの部屋がある。1階はもちろん食堂だ。

階段を上り終えて部屋の戸を開ける。

私は机の上においてあるペンとノートを手にとった。

もう1年経っちゃったけど私は日記をつけることにした。もし私みたいな人がまた来た時の為にだ。私はあの異世界人の日記のおかげで生きているといってもいいくらい日記に恩があるので私ももし役立ったらと思つて書くことにした。

本当はもつと前からそう思っていたのだが、なかなか忙しく書き始められなかったのだ。

「さて、タイトルは何にしよう？」

一人なのをいい事に独り言を言ってみる。だってなんか喋ったほうが思いつきそうだったからね。

「うーん、どうせならそのタイトルだけで内容がわかるようにしたいよなー。うーん……」

私は悩む。タイトルなんてそんなに大事じゃないんだがなんだかこたわってしまう。

なんとなく私のシーというあだ名に3日3晩悩んだ友達の心がわかつた気がした。

「うーむ……。よしっ！これにしよう。」

私は日記帳の表紙にでかかど日本語でタイトルを書く

《異世界トリップ者の異世界奮闘日記》

「よし！あんだけ考えて結局なんのひねりも無いけど良しとしよう！さて早速書くかな、中身。」

こんな風に日記を書き始めた頃の私は知る由も無かった。
この平穩であたたかな日常に終わりが来ることを。

表紙とタイトル（後書き）

すみません。サブタイトル変えることにしました。この話を表紙にして次から1ページにします。前の話は過去編1とかに変更します。急にすみませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8852y/>

召還者の異世界奮闘日記

2011年11月30日19時47分発行